

「翻訳出版」事情

本作りの現場から

細江 幸世

●子どもの本の翻訳の大きな流れ

現代日本における絵本や児童文学の概念は英米からはじまった近代絵本や児童文学を学んで培ってきたもの。それゆえ、最初は英米の翻訳本が刊行されることが多かった。戦前より海外の絵本や読み物を手にとってきた光吉夏弥や石井桃子によって一九五〇年の「岩波少年文庫」、一九五三年の「岩波の子どもの本」で翻訳本が刊行されてから、ぞくぞくと子どもの本が翻訳出版されるようになった。それに刺激されたかのように、一九五六年には福音館書店から「こどものとも」が創刊。一九六〇年代には福音館書店とともに至光社、こぐま社、偕成社などが日本ならではの創作絵本を目指し、今日の絵本出版の活況へとつながっていく。

七〇年すぎから本格的にドイツ、フランス、のちにオランダ、北欧、スペインなどヨーロッパの絵本や児童書も翻訳出版されるようになった。最初はビジュアルが特徴的な絵本が多く刊行されたが、テーマ性、文学性の高い児童文

学も意欲的に刊行されている。幅広くその国の作品を読み、その位置づけをきちんとした上で、作品紹介する翻訳者が多いことが日本の翻訳文化の質を高めているといえよう。

現在、アジアの国々でも児童図書出版が盛んになり、独自の文化を表現し、国際的にも高く評価される出版社も出てきた。世界的に多文化共生の視点を持った作品が多く刊行され、その翻訳本を読むことが、現代の複雑な状況や様々な文化に出会うきっかけともなっている。

